

# 韻律分析によるアパブランシャ語の 格形式の確定

山 畑 倫 志

本稿の目的はアパブランシャ語 (Ap) の名詞格語形の揺れの基準を把握するための手段として、韻律と格語形の選択との関係を探ったものである。

## 1. アパブランシャ語の格形式

中期インド語の一つである Ap はその言語形式においていくつかの揺れを持っている。揺れの出現は様々な様態をとり、地域や時代といった言語の変化・変異といった面で解釈できるものもあるが、同時代同地域のもの、あるいは同一作品の中でも揺れが見られる。言語の特徴を記述する際、これらの機能を同じくする格形式をただ並べるのではなく、何らかの基準によって使い分けがなされていたとみなすことができれば、より整った記述が可能であると考えられる。本稿では a 語幹男性名詞に限って論を進める。Ap に言及する中世インドの文法家は幾人かいるが、実際に Ap による著作が盛んだったのは現在のマハーラーシュトラ、グジャラート、ラージャスターンを中心とした西部であり、そこで用いられていた言語をもとにした文法記述が Hemacandra (1088/1089-1172/1173) の *Śabdānuśāsana* の第 8 章である。Hemacandra による a 語幹男性名詞の記述は 8.4.331-339, 342, 346, 347 に見られる。彼に対してインド東部を中心とする一群の文法家たちがいるが、その記述内容はやや異なる。彼らは Ap の下位のカテゴリーを認め、複数の言語名を Ap として挙げている。そのうち Nāgara と呼ばれる言語が中心的に記述されており、標準の地位を占めている。

## 2. 韻律と形式選択

現存する Ap のテキストは全て韻文である。文を韻文で表す場合、モーラ数や音節の長短、さらに脚韻などのため語や形式の選択に制限がかかる。そのため個々の文に適用されている韻律と語や形態の選択には何らかの関係があるものと考えられる。同一の機能を持つ複数の形式が併用されており、それぞれの出現頻度も

## (244) 韻律分析によるアパブランシャ語の格形式の確定 (山 畑)

大きく変わらない場合、どれが主たる形式かの判断は難しい。韻律は文中の特定の箇所に音節の長短などの制限を課すため、形式選択に影響を与えうると考えられる。そこで韻律の影響下にある形式の分布と影響下にはない形式の分布を比較した時に大きな違いが見られるならば、韻律の影響を受けない分布をその言語もしくは文献の主たる言語特徴とみなすことも可能であろう。そこで Ap による説話文献の一つである *Paumacariu* (PC) を調査対象として韻律と格形式との関係について分析した。

3. *Paumacariu* の格と韻律

PC は Svayambhū (8 世紀) による説話作品であり、マハーラーシュトラ地方において著されたとされている。内容はラーマ説話をもとにジャイナ教の考え方に基づいて改変したものである。この作品に出現する格形式であるが、De Clerck (2005) によれば a 語幹男性名詞は表 5 のような格語尾の形式を持ちうる。

	Singular	Plural
Nominative	-u	-a
Accusative	-ū, -au, -aum, -a, -o, -ao, -am, -e, -ae, -āe	-ā
Instrumental	-em, -eṇa, -eṇam	-ehiṃ, -ehi
Dative-Genitive-Ablative	-aho, -āho, -a, -u, -assa, -āsu, -āu	-ahum, -ahu, -āhum, -aham, -aha, -āham, -āha, -āṇa
Locative	-e, -ahiṃ, -ammi	-ehi, -ahiṃ, -ahi, -esu
Vocative	-a, -ā	-aho

表 1 PC における a 語幹男性名詞の曲用語尾

PC の作品としての形式はもっとも大きなまとまりにあたる sandhi が 90 あり、総詩節数は行数でみて 29934 行である。行ごとに区切られた電子テキストが存在するが、韻律情報を伴ったデータは未だ存在しない。そこで詩節の行数、モーラ数、音節の長短の情報をもとに自動的に韻律を付与した<sup>1)</sup>。それにより 20048 行に韻律情報を付与した。

4. 調査結果<sup>2)</sup>

脚末の音節には韻律によりしばしば長短の制限がかかる。そこで長短の制限のかかる部分に出現した格語尾とそれ以外の格語尾の頻度を比較し、関連の有無を調べた。その調査結果を表2と図1で示す。

		unrestricted	restricted
Instrumental Singular	<i>-em</i>	1539	653
	<i>-eṇa</i>	2011	1150
	<i>-eṇam</i>	30	80
Dative-Genitive-Ablative Singular	<i>-ho</i>	2188	911
	<i>-su</i>	254	170
	<i>-ssa</i>	55	2
Dative-Genitive-Ablative Plural	<i>-hu</i>	343	94
	<i>-hum</i>	619	335
	<i>-ham</i>	278	158

表2 韻律制限の有無と格語尾の形式との関連

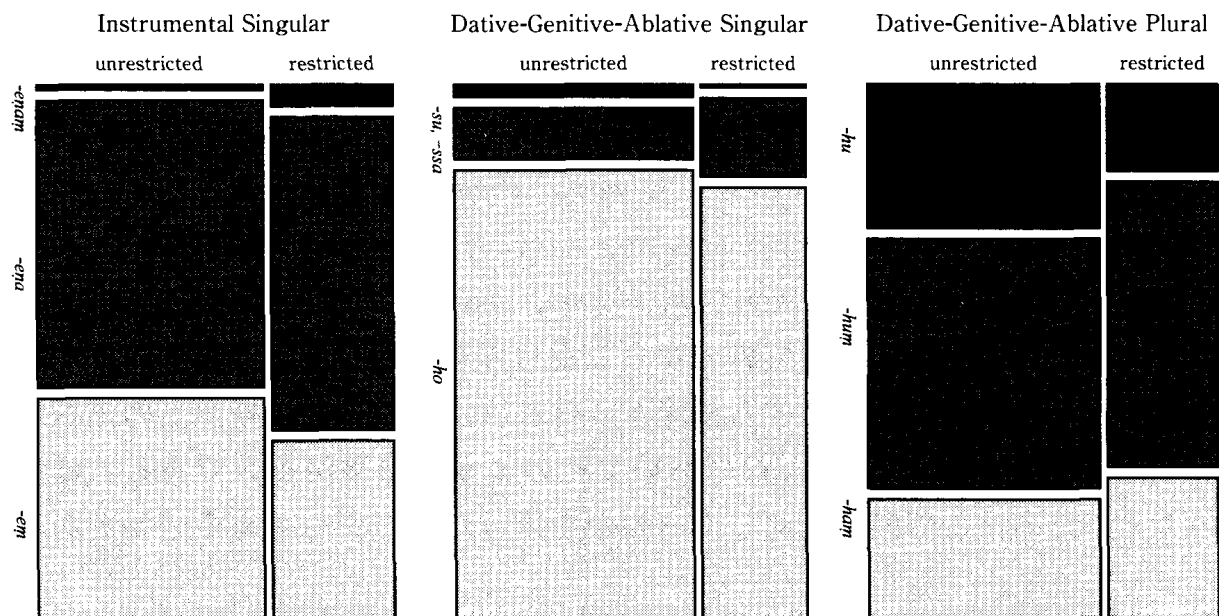


図1 具格単数, 与属奪格単数, 複数それぞれの並立する形式と韻律の関係

表2の三種の格形式について韻律の制限との間に何らかの関連があるかを調べるためには独立性の検定を行う必要がある。サンプル数をコントロールするためにPC全体を100個の語連続、各々の語数おおよそ1000語に分割した。そして

## (246) 韻律分析によるアパブランシャ語の格形式の確定 (山 畑)

それぞれの語連続のなかにおいて、制限のかかる格語形が多いかどうかによって分類した。これにより一部に集中して現れる格語尾の影響を削ぐことができる。

		unrestricted	restricted
Instrumental Singular	<i>-em</i>	78	18
	<i>-eṇa</i>	76	23
	<i>-eṇam</i>	6	17
Dative-Genitive-Ablative Singular	<i>-ho</i>	93	7
	<i>-su</i>	61	26
	<i>-ssa</i>	22	1
Dative-Genitive-Ablative Plural	<i>-hu</i>	76	11
	<i>-hum</i>	76	13
	<i>-ham</i>	67	17

表3 表2を100分割した語連続ごとに再計数

表3に基づいて行った独立性の検定結果は以下のようになる。

Instrumental Singular 自由度2,  $\chi^2$  値 29.97, p 値  $3.1 \times 10^{-7}$

Dative-Genitive-Ablative Singular 自由度2,  $\chi^2$  値 20.63, p 値  $3.3 \times 10^{-5}$

Dative-Genitive-Ablative Plural 自由度2,  $\chi^2$  値 1.99, p 値 0.37

検定の結果から、韻律の制限と格語形には以下のような関連があると言える。

Instrumental Singular *-em* に対して *-eṇa*, *-eṇam* が優勢になる。

Dative-Genitive-Ablative Singular *-ho*, *-su* に対して *-ssa* が優勢になる。

Dative-Genitive-Ablative Plural *-hu*, *-hum*, *-ham* には大きな違いがない。

以上より韻律の制限によって脚末から二番目の音節が長音節となることが見て取れる。もし当該音節を長とする韻律が多ければ、そのことが格語形の選択に影響を与えていると言えるが、PCにおいてそのような韻律が多数であるとは言い難い。そのため、この関連は何によるのかを違った視点から考える必要がある。

1) 同著者の *Riṭṭhanemicariu* と Hemaandra の *Chando'nuśāsana* をもとにした。

2) Eva De Clerck, 2005. *Een Kritische studie van Svayambhūdeva's Paūmacariu* に基づく。

〈キーワード〉 アパブランシャ語, 韻律, 形態論, *Paumacariu*

(日本学術振興会特別研究員)